



ベロの辛抱

田中かわず

ベロの辛抱

1

ご主人様は、子どものときから、随分虫歯とその治療には悩まされてきはった。大人になっても虫歯を疼かせては歯医者に通ってはったが、疼きが治まるとすぐに治療を止めるということをして繰り返して、そのうち歯槽膿漏にも罹り、口ん中はさながら歯病のデパートメントみたいになってしもた。

けど、ここ5年間ぐらいは、詰物や被せがとれて物を噛むのにかなり不自由してはったが、歯が本格的に疼くようなことはなかったから、なんとか歯医者に通わずにすんだんや。

ところがや、去年の夏、遂に虫歯の反乱が始まってしもた。

今回の歯の痛みは5年間寝かせてきただけあって強烈で、ご主人様にとって、この痛みに耐え続けることなどでけへん相談やった。遂に重い足を引きずるようにしながら、職場の近くの歯医者さんの扉を叩きはったんや。

ご主人様にはどこかひねたところがあって、歯医者さんに通う自分自身や治療行為を茶化してみたれという思いがあるんやろな、治療に通う毎に、先生宛にちょっとした手紙を書いて渡してはった。これがその手紙の束や。あんた、まあ、一遍読んでみたって。

ところで、おまえは何者やって？ なにを隠そう、このわては、これまでご主人様の歯痛の苦労を最もまじかで見してきた、そう、ご主人様のベロでんねん。

(ご主人様が初めて歯医者を訪れた日に渡した手紙)

目覚めれば 虫歯の痛みに 耐えかねて 白々夜明けに バファリンを飲む

来るべきときが遂にきた。私はそう思う。

思い返せば、私が最後に歯医者に行ったのは、5年前のことやった。そのときも歯が疼いて辛抱たまず、今度こそは最後までしっかり治療しようと誓ってたのに、その痛みがとれたらもう歯医者通いを止めたんやった。

あれから上の奥の歯の被せがとれたときも、下の歯がぐらついて歯茎がプックリ膨れて疼いたときも、まだ本格的な歯痛は始まらなだから、私はなんとか耐えてきた。

あのおろちの胴体のようにクネクネ動く金属棒のその先端の針や歯車が、キューンキューンと唸る音を聞くと、子どもの頃、下手な歯医者にかかってしもて治療の後の血が止まらず、1日中、口の中が血でネチャついたり、化膿した歯茎の膿をとるときの耐えがたい痛みが、まるで昨日のこのように思い出される。

しかし、もう辛抱ならん。このまま歯痛を放置してたら、私は気が狂ってしまうかもしれん。先生、頼みます。

こりゃア、総入れ歯にするしか手はないなアなんて言わんと、この歯痛のデパートメント、どうにかしとくなはれ。歯医者は私のトラウマです。ホンマ、痛うてたまらんのです。痛うないようにじょうずに頼みます。

私は、この4月に、ほら、この近くにある大和川出張所に転勤してきたとこやから、ここらにきて日が浅いんで、先生の歯医者としての腕のほどは、まだ噂にも聞いてへんけど、病院の雰囲気からしてきつとじょうずに違いない、そう信じてます。

ホンマ、信用してまっせ。私も今度こそ最後までばんがりますよって、先生、頼みましたで。

8月下旬 吉日

(ご主人様が2回目の治療の日に渡した手紙)

この前の治療の日、先生にうっかり痛み止めをもらうのを忘れてて、今日まで私はバファリン一箱とナロンエース一箱を飲み尽くし、今はもう、何かヤクチューになったように頭の中がレロレロや。

先生は、この前、歯病のデパートメントになっているこの私の口ん中を覗き込み、レントゲン写真と見比べながら、その治療法を私に説明してくれはった。恐れていた総入れ歯は堪忍してくれはったが、さあ、これから治療が大変や。私に最後まで頑張る自信はない。

今日は下の奥の歯が抜かれる日。カレンダーを見るとなんと仏滅やないか！

以下は、歯痛に耐えながら、3日前に私が書いた文章です。心情、お察しの上、先生、優しく、痛うないよう、しっかり頼んませ。

歯が疼く。外界に皮一枚隔てた体内を、心拍に合わせてかけめぐる血流の、その脈動に呼応するように歯が疼く。そんな言い方は大袈裟かもしれないが、それでも言わなければたまらないほどに歯が疼く。昨夜、その疼きに耐えかねて口を開いて喘いでいると、妻はこう言った。

「歯の痛みは頭に近いから痛く感じるだけで、同じ痛みでもそれが足先だったら、そんなに痛くは感じないってよ」

確かに、危険を察知した脳みそは、同じ痛みでも自分に近い部位ほど強く痛みを感じるように仕組んでいるのかもしれない。そうであるならこの同じ痛みが仮に足先にあったなら、蚊が刺す程度にしか感じないのかも知れぬ。

なんだ、たいしたことないじゃないか、そう考えてもその疼きは和らぎはしない。

その昔、明け方の薄明かりの中で、ほとんど一睡もしないまま鏡を見て、その中に見た頬の腫れに驚いて泣き出した少年時代を思い出す。

歯が疼く。

つい最近、顔ダニのことをテレビで解説していた。誰でも毛根に顔ダニを持っているそうで顕微鏡で見るとおぞましい限りだが、この顔ダニの中にも実は善玉のダニがいるから、あまり潔癖に顔を洗うのはかえってよろしくないといった内容だった。同様に、ひよっとすると虫歯菌には悪玉ばかりじゃなく善玉もいるのだろうか。今度、歯医者に確かめてみようなどと考えてみても、もちろん歯の疼きは治まりはしない。

歯が疼く。ヒトの完璧を思う。こんなちょっとした痛みで、ヒトは人格が変形するほどに苦しむのである。平常時のヒトの体というものはなんと不思議に満ちた完璧なものであることか。

そして人体の脆さを思う。ヒトの完璧を守っているのは外界を隔てるこの薄っぺらな皮膚のみで、そしてたった虫歯の疼きだけで平常だった昨日の私は、今日は奈落の底に落ちているのである。

それにしても歯が疼く。昨日からあまりたいしたものを食べてはいない。なんだ、簡単なこ

とじゃないか。あんなに騒ぎ立てているけれど、ダイエットに苦しむ世の女性は歯痛になればいいんじゃないか！

この世にはいろんなものを書く人がいるから「歯痛によるダイエット法」なんて本もひょっとすると出版されているかもしれない。明日、本屋さんに問い合わせしてみようなどと考えても歯の疼きは当然のことながら治まらない。

歯が疼く。上沼恵美子ややしきたかじんのように、歯に衣を着せず、好き放題に物が言えるのなら、この痛み、少々我慢もできようが、私は、毎日、人に頭を下げるだけの一介のサラリーマンである。そのサラリーマンの歯がここまで疼くとはなんと理不尽であることか。

歯が疼く。急造「マゾ」に変身すれば、この痛みも快感に変わるかもしれないと念じ、マゾになった心持ちで歯の疼きという快感を得ようとしても、その痛みは変わらない。本物の「マゾ」は急づくりの「マゾ」などすぐに見分けるようなのだ。

夜も白々と明け始めた。虫歯よ。私は昨夜から1秒たりともおまえのことを考えないときはなかったよ。そろそろおまえも疲れたろう。夜明けがくれば、それからはきっとまた、おまえに付き合うと約束するから、これから夜明けまでの小1時間、私に安息のときを与えておくれ。

9月初旬 仏滅

(ご主人様が、3回目の治療の日に、前回の治療のことを書いて渡した手紙)

唇が、たらこのようにぷっくり膨れてしもたような感じや。麻酔が効いてきたんやな。さあ、これからいよいよ抜歯。金属を被せた1番奥のその下の歯2本が、レントゲンで見るともうボロボロになってて、抜く以外に治療法がないと先生は言う。その歯をこれから金属の被せをとって抜こうという訳や。

しかし待つ身は辛い。麻酔をしてからまだ10数分しか経ってへんのに、もう1時間ぐらいは過ぎた気がする。こういうときはホンマ、時間を長う感じるもんや。早う先生が来てくれて治療して欲しいような、逆に急に地震でも起きて治療が中止になって欲しいような、そんな複雑な心境や。

しかし、あのキューーンという擦過音を口の中に聞くと、どうしても体に力が入ってしまう。先生が私のところにきて治療が始まると、私は痛うもないのに、口の中に広がる金属音に両手で肘掛を握りつぶすようにぐっと掴み、体全体に力を入れてアアッと唸ったんやった。

「大丈夫ですよ。痛くはないでしょう？ 力を抜いてください。金属の被せを切っているだけですから」と先生。

「いたけはにゃいれす」

痛くはないですと私は言ったんやが、口を開いたまま言葉を発したからこういう発音になったんや。

「これが悪くなった歯ですよ」

そう言いながら、被せを切り取ったその下の腐りきった歯肉だか歯片だかを、先生は手鏡で私に指し示したんやが、私は自分のものながらそんなおぞましいもん見とうもなかった。

なんぼインフォームドコンセントが大切や言うても、先生、あんなんはもうええよ。

9月下旬 赤口

(ご主人様が4回目の治療の日に、前回の治療の後のことを書いて渡した手紙)

歯を抜いた後の歯肉に舌を滑らせるとヌルヌルした。鏡で顔を見ると抜いた左頬が少しぷっくり膨れてる。なんか膨張感があって気色が悪い。

抜歯の後に渡された注意書きにはこう書いてある。

「今夜はお風呂には入らないように。飲酒も控えてください。化膿どめはしっかり服用してください。エッチは控えめに」

最後の注意書きは冗談やが、飲酒をするな言われても、それは私には無理な相談や。

(何をちょこざいな。風呂に入るな言うんはわかるが、酒を飲むな言うんは私には守られへん。それに歯が痛んだら、ちょうど酒が麻醉がわりになるというもんや)

これは酒飲みの正当な屁理屈である。

翌日、抜歯の結果を見たいんで、病院にくるようにとの先生の指示に従って、私は病院に行った。抜歯の結果を見るだけで治療はない。気が楽である。

「どうですか。歯は痛みましたか？」

「ええ、ちょっと痛んだんで、酒で麻醉をしましてん」

先生の目が笑っている。

「ちょっと腫れていますが、大丈夫ですよ。この腫れも徐々に引いてきますから。でも化膿止めは必ず飲みきってくださいね。え、右の上の歯が沁みて痛いって？ そりゃア、そうでしょう。この歯は神経は死んでませんが、ひどい虫歯になってます。その虫歯の奥の歯は、ほら、ご覧なさい。神経も死んでしまって、抜くしか治療方法がありません。それじゃア、今回は、この2本の歯を治療しましょうか。歯が沁みるのは辛いでしょうから、今日は、この歯にジェラシードを詰めておきましょう。ジェラシードって何かって？ ああ、これは仮の詰物ね。気休め程度の効果しかないけどね」

今日の治療費はしめて170円やった。安い。ダイエーの安売り発砲酒は1本98円だから、もうちょっとでその発砲酒が2本買えるほどの料金である。しかしこれは治療費全額ではない。一部負担金である。私は考えた。

(自己負担が3割で170円言うことは、治療費をXとしたら、Xかける十10の3が170円やから、Xイコール170円割る10分の3が治療費と言うことや。そんなら170円を3で割ったら何ぼや。あれ？ 割り切れへんのとちゃうか？ まてよ、なんか計算おかしいんかいな。ええい、こんがらかってしもた。計算機がないとようわからん！ もうええわ)

(ご主人様が5回目の治療の日に渡した手紙)

ジェラシードが取れてしもたんは、その治療の日から4日目のことやった。歯を磨いていてとれたんや。思わずカレンダーを見ると仏滅！ やはり応急措置は応急でしかなかったんやな。

左奥下の歯は抜かれてスカスカになって物は噛まれへんし、かといって右の歯で噛もうとしても、ジェラシードがとれた後は、物を噛むとやけに沁みたり痛んだりする。

私は反っ歯やから、前歯の上下はもともと噛み合うことがない。いつやったか虫歯を治療したときに、おかまみたいな先生にこう言われたことがある。

「ねえ、ごらんになって。ほら、前歯の先っぽが波打ってるでしょう。ねえ、小さいときは、歯はみんなこんな風に先が波打ってるんですけど、物を噛んでいるうちに徐々に先が擦り切れて、平らになるんですよ。ねえ、あなたは反っ歯だから、上の歯と下の歯と噛みあわないまま今日まできたのね。ねえ、わかる？ いやァねえ、そんなこともわからないの？ あなたって頭悪いのね。ホホホ」

左側の歯はスカスカで、右側の歯は物を噛むと疼き、前歯は噛みあわない。物を噛めるところがどこにもないから、食べる物すべて丸飲みである。

まったく物を噛めないのは、八方ふさがり、五里夢中、七転八倒、阿鼻叫喚。まあ、酒を飲むのに支障はないけどね。

それでもすべて丸飲みいう訳にもいけへんから、私は柔らかい物を右の歯で恐る恐るゆっくり噛んで食べることにした。

ある日のことや。アジのたたきやったら柔らかいから少々噛んでも大丈夫やと思て、ちょっと強めに噛んだ。ところがそのたたきの中にちょっとした小骨が残ってて、その骨が運悪く右の虫歯の中に刺さったからたまらへん。脳髓を針で直接刺したように鋭利な痛みが全身に広がって、私は食卓の椅子から飛び上がり、妻が怪訝がるのをよそに、しばらく熊みたいに居間をウロウロしたもんや。ホンマ、もう、たまりませんわ。

10月初旬 友引

(ご主人様が6回目の治療の日に、前回の治療のことを書いて渡した手紙)

「それじゃ、椅子を倒しますね。治療してて痛かったら左手を上げてください」

そう先生は言いはった。私は、右手じゃあきませんか？と冗談を言って余裕のあるところを見せようと思ったが、それは言葉にならへんかった。やっぱり緊張してたんやな。

上唇あたりが麻酔でたらこのように腫れあがった感じがする。歯科助手さんが私の顔にガーゼを被せて、口の中に強力吸引器を突っ込む。先生は突端に虫歯破碎装置のついた器具をクイーンクイーン唸らせながら私の口の中に入れ、歯を切り刻んだ。

私が「ア、アッ」と声にはならへん声を出して体に力を入れ、肘掛を力一杯握りしめると「力を抜いてください。その方が楽ですよ」そう先生は優しく私を諭しはった。

(口の中が焦げてる！)

このツンと焦げた臭いには覚えがある。あれは自転車の荷台に荷物をくくり付けようとしたとき、何かの拍子で荷紐が1回転し、先端の金属鉤が私の前歯を直撃したときのことやった。

カーンという金属音がして、その衝撃に前歯が欠け、口の中に何か焼けるようなキナ臭いにおいが広がったんや。あの臭いや！ ホンマ、あれは痛かったなァ。

私はそのことを思い出してたまらなくなり、痛くはなかったが思わず先生に左手を上げたんやった。

「ちょっと口をゆすぎましようか。痛かったですか？」と先生。

口をゆすいだ後、2度ばかり大きく深呼吸して私は言った。

「痛くはないんやけど怖いんです。ホンマに情けないこってすんまへん」

そのあとの治療がまたハードやった。歯が削られると口の中に嘔吐感が広がってきて、私は左手を上げては先生の治療の手を止めた。口をゆすぎ冷汗をぬぐって深呼吸し、椅子が倒され、また歯が削られ始めると、私は嘔吐感にたまらず、また手を上げた。

それを何度繰り返したやろ。きっと先生にマゾの気があるなら、体中がゾクゾクしはったに違いない。虫歯破碎装置も獅子奮迅の大活躍や。私はもう最後の方はへ口へ口になってしもた。

見るにみかねた先生の言うことには

「今日は横の虫歯も一緒に抜こうと思っていたけど、それは次回にしましようか」

(助かった！)

私の心の声や。

会計を済ませながら私は思ったもんや。

(今日みたいにハードなんはもうかなわん。これで歯が痛まなんだら、しばらくここにこんといたるか)

しかし、しかしと私は考えた。

(麻酔をした後、先生は言いはったやないか。あなたの手紙を、スタッフも結構楽しみにし

てるって。それがホンマやったら、こんな嬉しいことはない。サービス精神は私の命や。スタッフの楽しみを奪うようなことしたらあかん。がんばろやないか)

10月中旬 先負

(ご主人様が7回目の治療の日に渡した手紙)

少し考えて見る。歯の見栄えが悪いこととペチャパイでは、どちらがその人の人格形成に悪影響を与える度合いが強いか。

この設問に正答はない。なぜなら歯の悪さやペチャパイであるということ、その人自身がどう思ってるかによってその影響の度合いは変わってくるからや。

けど、私はときに、私の歯並びがあつた元野球選手の新庄のように、白くキラキラ光っていたら、私の人生も今とは違ったものになったんじゃないかと思うことがある。歯に対するコンプレックスは、これまでの私の人生に微妙に暗い影を落としてきたんや。

私は、人前で話すとき、大きく口を開けて明るく笑うということ、これをこれまでしたことがない。いつも相手が私のこの歯をどう思ってるやろと考えると、ついつい口に手を当てたり、なるべく口を開けないようにしながら笑ってしまう。

この人、けつたいな笑い方すんなア、どこか変なんちゃう？ なんて思われることがわかってても、口を開けて明るく笑うことは私にはでけへんのや。そしてそのことをうじうじ悩み、自分自身が嫌になって気分が暗くなる。気分が暗くなると何もやる気が起きなくなる。やる気がなくなると寝てばかりでぶくぶく太る。

そうか、私の腹がこんなにブヨブヨになったんは歯のせいかな！ まあ、これはちょっと大げさやが、こんな風にしてこれまで、歯並びの悪さや黄ばみが、私の性格に微妙な影を落としてきたんや。

あれは歯の痛みが治まって、またそろ治療を先延ばししようと思ひ始めた日のことやった。職場のみんなで、夕方から駅近くの居酒屋で宴会をした。私はよっちゃんの横に座った。この事務所に転勤して数ヶ月の私には、まだ親しい飲み友達はいてへんが、よっちゃんは、以前、梅田北事務所で一緒やったことがあり、職場でも結構気軽に話しかけることができたからや。

よっちゃんはざつぱらんない男だが、ときにそのざつぱらんない物言いが災いして人の聲をかうことがある。

私はいい機嫌でビールを飲みながらよっちゃんに言った。

「どうもこの肉、硬いな。歯の調子が悪いから、噛み切れへん」

「歯が悪いん？」

「そうやねん。今、歯医者に通てんねん。よっちゃんは歯は大丈夫なん？」

「確かに、おまえの前歯、スカスカしててみともないな。それに下の歯は欠けてるし。なんか顔つきがいやらしく見えるぜ。それに反っ歯やし」

こんなにズケズケと歯の悪さを指摘されたのははじめてやった。私は顔が火照って恥ずかしく、思わず席を立ってトイレに入ったんや。そして、いつもはあまり鏡を見ることのない私やが、このときばかりは口を開けたり閉じたりして、しみじみ自分の顔をためつすがめつして見た。下の前歯に欠損があり、上の前歯は反っ歯の上に、やや左辺りに大きな隙間があって、その隙間

を両サイドの歯が徐々に浸食し、そのために歯と歯の間が密度を失って、野放図に左右に広がっている。それに歯は白さを失い黄ばんでる。ホンマに見苦しいことこの上ない。

私はしみじみ思うたもんや。

(ああ、汚ねえなあ。メガネは曲がってるし、根性も曲がってるし、歯は欠損だらけで、こんなじゃ、女の子にもてるわけないわなア。こりゃア、やっぱり頑張っ歯の治療にいくっきゃないな)

先生、こうして私は歯の治療のトラウマにくじけそうになる心に鞭打ってここに来たんです。けなげなことじゃろ。

ホンマ、優しゅう、丁寧に頼んまっせ。

10月下旬 大安

(ご主人様が予約していた治療を延期した日に渡した手紙)

2日酔いで気分がすぐれず、それに仏滅ですので、受付のべっぴんさんに言って、今日の治療を延期していただきました。次の予約日には必ず来ます。すみません。

11月上旬 仏滅

(ご主人様が、再度、治療を延期した日に渡した手紙)

今朝は、朝から雨がシトシト降って、ちょっと気持ちがグルーミーです。それにカレンダーを見るとまたもや仏滅。幸い歯も疼いてはいないので、またもや受付のべっぴんさんに頼んで、治療を次回に延期していただきました。堪忍してください。

11月中旬 仏滅

(ご主人様が、またまた治療を延期した日に渡した手紙)

今日こそは治療にいかうと、朝から齋戒沐浴、固く決意していましたが、朝、職場に向かって歩いていると、目の前を黒い猫が横切りました。大通りでは霊柩車にも会いました。今日は大安ですが、治療は延期していただくことを受付のべっぴんさんにお願いしました。お許しのほど。

12月中旬 大安の日

(ご主人様が、年の瀬のある日に書いて、受付のべっぴんさんに渡した手紙)

前略

先生やスタッフの皆さんにはお元気でしょうか。

私は、この夏、歯痛の痛みに耐えかねて貴医院を訪れたのですが、あれから早いもので、もう五ヶ月が過ぎ年末になりました。

歯病のデパートメントを自認する私の歯の治療は、「ほら、口を大きく開けてごらん下さい」

そう優しくおっしゃる先生の声で始まったのでした。

それから右下奥歯の神経をとった7度目の治療までは、自らを励まして何とか貴医院に通いましたが、その治療で痛みが治まってからは、予約日を数度延期し、遂にはその延期した予約日もすっぽかして今日に至っています。

歯痛が治まるとすぐこれです。こうして治療を延期すれば、次の痛みがやってきたときは、また1からの出直しで、更に治療に日数を要することはわかっているのですが、古い歌の文句じゃないけれど、わかっちゃいるけど止められないのです。これをして人は私のことを、怠惰、モノグサ、いくじなし、人格欠陥、女たらしと非難しますが、小さいときに受けた陵辱的とさえ思える歯の治療のトラウマは、貴医院に治療にいこうとする私の良き心をせき止めてしまうのです。

人の体の中でも精密な知覚器官の一つである舌で口腔内をまさぐると、先生に抜いてもらった左下の奥の歯2本の跡は、スキーを楽しめるほどにつるつる滑ります。神経を抜いて仮の詰物をしてもらった右上の歯は、詰物がとれた跡に活火山の火口のような穴がぽっかり空いています。左上の歯に巣くっていた虫歯は、穴が大きさを増して、来るべき歯痛のときを今か今かと待っているようです。前歯の歯茎は腫れ始めていて、物を噛むとその前歯がやや痛みます。どうやらこの歯がぐらつき始めるのも時間の問題でしょう。

来年こそは決意も新たに貴医院に通いたいと思います。こうしようと決めたときからその決心を実行に移すべきで、元旦の決意なぞ守られはしないと人はいいますが、やはり1年の計は元旦にあり。この正月には、歯病のデパートメントの大掃除、大改修のために貴医院に通う決意をすることを、私は今、このとき、強く決意します。

本年は、懇切に治療していただいた上に、この私のつまらない手紙にもお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

来年が先生やスタッフの皆さん、そして受付のべっぴんさんにとって幸多い年となるとともに、貴医院がますます隆盛されますことを心からお祈り申し上げ、私の新たな決意をここに披露して筆を措きます。

ありがとうございました。では来年早々にきっとお会いしましょう。

これが、ご主人様が治療の毎に先生に渡した手紙やねん。ようまア、こんなことを毎回毎回、飽きもせんと書きはったもんや。先生や歯科技工士さんの歡心を買おうとする思いが見え見えやけど、ご主人様が歯痛とその治療に苦しんではったんもこれは事実やねん。わてが見ても可哀想に思えることもあったで。

けど、わてもご主人様の歯痛では苦労したで、ホンマ。そんなわての話も、あんた、聞いてくれるか。

まずは、治療した歯のうち、右の奥歯の詰物が、砂ずりを食べていて取れてしもて、続けて正月に食べたもちに左の奥歯の詰物も持ち去られ、両サイドの奥歯にぽっかり大きな穴が2つ開いたときのことや。

ご主人様は、わてを使うてこの穴の形状を丹念に探りはった。右の方は穴がかなり深い。わてをその穴の底まで入れようとしても届かへん。お椀の形をした穴の回り3分の1ほどはもう歯の骨片がのうなって、わてがなめるとツルツルする。残る3分の2ほどには、詰物がとれた後の歯が鋭利な形で残ってて、わてがその周辺をまさぐってみると、その歯は刃物みたいにわてに襲いかかってくるんや。

一方、左の奥歯は、右に比べると穴はやや浅いんやが、その穴の回りはこれまた歯が鋭利に露出してて、わてがそれをまさぐると、うっかり間違えればその歯に突きさされてしまいそうになる。

ご主人様も治療にいく必要があるんはわかってはるんやが、歯医者に行くんが嫌なもんやからほったらかしにしてるうち、陥没した歯の周辺が徐々に痛み出してきた。

何か食べたら両方の穴に物が詰まってしまうから、ご主人様はわてを使うて詰まった物を取り出そうとしはるんやが、これがなかなかうまいこといかん。その上、ご主人様は穴の回りが気になってどうしようもないらしゅうて、四六時中、わてを酷使し、歯茎や穴やその回りをべろべろ舐め回しはるもんやから、ときに鋭利な歯片がわてに突き刺さって痛うて、遂にわてもどたまにきた。痛い、痛い言うて悲鳴を上げたったんや。

ご主人様も自分のペロが疼くんは初めての経験やったから、図書館で医学書開けて、舌ガンの項を読んでみるとこんなことが書いてあった。

「舌ガンの顕著な兆候に舌の痺れがある。清涼飲料水やビールなどを飲むとチリチリ沁みて痛む。そのうち味覚に障害が出て、物を食べても何も感じなくなる」

ほんで、ご主人様はわての悲鳴を舌ガンやないかと勘違いしはってな。ほんなら耳鼻咽喉科にいきゃアいいのに、近くの病院の内科に検査にいきはった。この病院の先生が、また舌ガンについてはまったくの無知でな。よくわかりません言うんは先生のプライドが許さんから、ご主人様の舌を診察した後、神妙な顔して「う～ん、これはちょっと。大学病院に行って精密検査を受けられたほうがいいですね」てなことをご主人様に言いはったんや。

これは自分でよう診断せんときのこの先生の癖なんを知らんご主人様は、その先生のいかにも深刻そうな物言いと顔つきに仰天してしもて、先生に「先生、ひょっとしてこれは舌ガンやないですか。正直に教えてください」て頼みはったんやが、「う～ん、検査の結果をみないとなんとも……」なんて先生が口ごもりはるもんやから、これはもう舌ガンに違いないとご主人様は確信してしまいはった。

それからというもの、わてが見てても気の毒なくらいご主人様は落ち込んでしもて。あれは大学病院に予約をとった前日のことやった。しばらく好きな酒を我慢してはったんやが、ひょっとしてこれが最後の酒になるかもしれん、そう思いはって、近くの居酒屋にいきはったんや。

「へい、いらっしゃい、何にしましょう」

いつものように威勢のいい兄ちゃんの声に、ご主人様は歯痛がひどいのんを忘れて、ついビールとその当てに好物の砂ずりを注文しはった。後悔先に立たずやけど、出されてきたその砂ずりは歯が痛うて噛み切ることがでけへんから、舐めるようにしながらビールを飲んでると、常連客の1人と店員のこんな会話が聞こえてきた。

「ところであの話どうなったん？」

「あの話て？」

「ほら、この間、言うてたやんか。やっさんの浮気がばれた言う話や」

「ああ、あれね。やっさん、こつてり嫁はんに絞られたらしいですわ。しばらく自宅謹慎を命じられてるて、きのうきたよっちゃんがそない言うてましたで」

「ほうか、やっさんもポカしたもんやな。あそこはノミの夫婦やから、そりゃア、やっさん、嫁さんに太刀打ちできるはずがないわな。きっとえらい騒動やったやろ」

「そりゃ、しょげてはりますやろな」

「妻はパンツをはかせ、愛人はパンツをぬがす言うてな。オトコはパンツをぬがしてもろたら、ヨダレもたれるわな。オレもぬがして欲しいもんやな」

「へえ、愛人はパンツをぬがすとはうまいこと言いはりますな。それ、あんたが考えはったんでっか」

「いや、オレやない。タベ、カミさんがそう言うたんや。オレもうまいこと言うなアて感心してな。どこかで使たる思ってたんやけど、やっぱり受けたな。しかし、ホンマにやっさんも災難やったなア。これまで長いことバレへんかったのに、今度はまたなんでバレたんやろ」

「それがまた、笑い話ですわ。やっさん、えらいベロが疼く、ひょっとすると舌ガンちゃうやろか、て言うてはりましたやろ。検査してもようわからん、精密検査が必要やと医者言うたんで、やっさん、ますます不安になりはったんですわ。これまで1度も医者になんかかかったことがない人やからね。なんか舌にしこりみたいなもん感じるとも言うて、どうもそれで、オレは舌ガンやと思ひ込みはったらしいんですわ。こら、先長うない思ひはったんでっしゃろな。それから、みっちゃんのところに入り浸っていたところをお縄というわけ」

ご主人様はこの話を耳をだんぼにして聞いてはった。

「ほんでガンの方はどうなったんや」

「それが笑い話ですわねん。やっさん、去年、歯の詰物とれた言うてはりましたやんか。結構大

きな穴やったみたいやけど、医者に行くの、嫌や言うて、ほったらかしてはったんですわ。でも何か食べたら直ぐにそこに物が入ったりして、気になって気になってしょうがなかったんですな。それで始終、ベロで穴のあたりを探ってはったんですて。

詰物いうんは虫歯のところを削って詰めますやろ。そうすると詰物がとれたら、穴の回りに結構、鋭い歯が残ってますやんか。その歯をベロであんまりいじくり回すもんやから、ベロが痛んで炎症を起こしたんやね。まあ、ベロの擦過傷というやつですわ」

ほんで、ご主人様も気がつきはった。

（擦過傷！ なんてることや。これは擦過傷やったんか！ それでこんなに痛いんも頷ける。詰物がとれてから、オレも毎日のように両奥歯の穴付近を探検した。穴の回りの歯にベロを這わせていると、確かに歯の先っぽがベロを突くようなことが何度かあって痛い目をした。そうか。ベロも『おしん』みたいに辛抱に辛抱を重ねていたけど、遂に耐えられへんようになったという訳か！）

ご主人様はあほらしいやら、嬉しいやら、こみ上げる笑いをこらえ、つい大きな声でビールを追加して一気に煽りはるもんやから、その冷たいビールが擦過傷を起こしてるわてにしみてしみて、わては思わず悲鳴をあげたんやった。

まったく、わがご主人様ながら、能天気で小心者で、ホンマ、困ったもんや。

こんなこともあったなァ。

ある日、仕事の出張の帰りにご主人様はうどん屋に入り、かやくうどん定食を注文しはった。のびきったうどんにすこし失望して、かやくごはんを食べると、口の中がジャリッというやないか。注意深くわてを使って口の中を探ると、何か石か金属片のようや。外に出してみたら、なんと歯の詰物やないか！

ご主人様に自分の詰物がとれたという感覚はなかった。わてにもなかった。けど、取れたんが自分の詰物やのに「こんな物が入ってたで」と店員に訴えるのはいかにも失礼千万や。" 3度探して人を疑え " との諺もある。

ご主人様は、わしを使うて注意深く口の中の詰物がとれてないかどうか探索しはった。3度探索しはった。取れてへん。ということはこれはご主人様の歯の詰物やない。急に胸が悪うなってきたはってな。

けど、元来、臆病なご主人様には、声高に「どうしてくれるんや。この店は歯の詰物をごはんに入れて売るんか」なんて抗議でけへん。それに、その昔聞いた、金を持たずにうどんを頼んでおいて、お椀にはえを入れ、「この店はこんな物を客に食わすんか」とすごんで賠償金をもせしめるというやくざな話をご主人様の脳裏に浮かび、誤解を受けるのもかなわんと思いはった。

そんなこんながご主人様の脳裏に浮かんたんやが、とどのつまり、やはりこれは店員に言うべきやと結論しはって、蛮勇を起こし、店員を呼んで「こんな物がごはんに入っていましたよ」て告げはったんや。

店員は驚いてな。「え、すみません。しかし、これは失礼ですがお客さんの物ではないですか？」とこうや。

「何言うてはりますねん。自分のは確かめましたよ」そうご主人様が気色ばんだら、やや間があって「ああ、すみません。すぐにかわりのごはんをもってきますよって」と店員が謝った。

(え、かわりのごはん？ それをどないせえ言うねん。食べよ言うことか？ そんなあほな) そう、ご主人様が頭ん中で右往左往してたら、さっさと店員が代わりのご飯を運んできてしもてな。

(これは果たして食べたもんかどうか。歯の詰物が入った同じ釜の飯。ここは憤然と席を立て、もう結構です！ とかなんとか言うて、店を出るべきやないか。けど……)

ホンマ、ご主人様の優柔不断にはあきれてしまうけど、そうこうしているうちに、小心なご主人様は何か割り切れない思いを抱きながらも、何とそのかわりのごはんには箸をつけてしまいはった。わてにはそのかやくごはんが、なんとも砂を噛むように味けのう感じられたんを、今でもよう覚えてるわ。

けど、箸をつけてしもたら、今更、どうすることもでけへん。ご主人様は何ともいえへん思いでそそくさと金を払って外に出はったんやが、その背中を店員の声がこう追いかけてきた。

「これに懲りずに、またのお越しを」

ああ！ 何ということや。このときばかりは、自分自身の情けなさにご主人様も頭を抱えては

ったな。

駅について構内に入ったら、立ち呑みコーナーがあった。ご主人様はここで、口直しにビールを呑むことにしはった。けど、かやくごはん1杯半とうどん1杯が、既に胃の腑を満たしていたから、ビールを飲んでもあまり旨うはない。やけにゲッポゲッポとゲップが出る。ご主人様は500ミリリットルの缶ビールを1缶呑んで、早々に切り上げることにしはった。

電車の窓から外の景色を見ながら、ご主人様がいつもの癖でわてを口の中に遊ばせてると、何か違和感があることに気付きはった。いつもとちょっと違うなァと口ん中をわてを使うてまざると、なんとそこにあるはずの詰物が見当たらずへんやないか！ 一瞬ドキッとしはって、丁寧にもう1度、口の中を探りはった。確かにない。

あんときあれほど探したのに！ わても驚いた。

(あれはやはり自分の詰物やったんか！ 確かに新幹線同様、経年劣化でそろそろ詰物が剥離する頃やが、ちゃんと修理すべきところは修理したはずや。それにガムならいざしらず、かやくごはんぐらいで詰物がとれてしまうやなんて。結局、オレは無意識のうちにかやくごはん1杯を騙しとったことになるんか。これはどうしたもんか。引き返して詫びをいれ、詰物を返してもらうべきか。けど、もうとっくにその詰物をごみ箱に入ってしまったているやろし。一見の店や。このまま放っておくしかないか。今更恥ずかしげものう、引き返すことなんかできそうにもない。けど、あんときあれほど探したのに！)

立ち呑みコーナーで飲んだビールが効いてきたんやな、そのうち思考がしどろもどろになってきて、ご主人様は浅い眠りについたんやが、その眠りの中で、歯と店員に追いかけられる怖い夢を見はってな。大きな声出して坐っていた座席から飛び上がりはるもんやから、回りのお客さんが何事やろ思てびっくりしてたわ。

ご主人様もえらいべそを掻いてたけど、恥ずかしいやら、あほらしいやら、ホンマ、間の抜けた話やで。

ご主人様が年の瀬に書いて渡した先生への手紙には、新年になったら必ず治療にいけますて書いてあったけど、あんたのご想像のとおり、あれから今日までご主人様は歯が疼かんことをいいことに歯医者さんには行ってへん。

けど、今また、先生に直してもろた右奥の歯の詰物がとれて、大きな穴ができたし、前歯も1本ガクガクして、これはもう抜いて差し歯にするしかあらへん。左奥の歯も歯茎あたりからジワジワ痛みが広がり始めてて、ご主人様が苦虫を噛み殺したような顔して苦しみ始めるんも時間の問題や。

そんなこんながあるから、ご主人様は、この頃、またぞろわてを酷使し始めてて、わても我慢の限界に近い。そろそろ癩癩を起こしたろかとも思てる。もう、ガンと間違いはることはないやろけど、そんでもわてが癩癩起こしたら、ビールを飲んでも沁みて旨ないし、物を食うても味なんかせえへんで。

早う歯医者にいきはったらええけど、こればかりはわてがなんぼご主人様をたきつけても無理やなァ。口ん中が火の車になって、ご主人様の頭ん中がレロレロになるんを待つしかない。ま

ったく困ったもんや。

けど、あんたにならできるやろ。あんたはご主人様の命そのもの、そう、ご主人様の心の臓なんやから。なァ、あんた、あんたからご主人様のどたまに強力な電波か電磁波なんかを送って、ご主人様の歯医者さんのトラウマ、どうにかしたってえな。

(了)